

ダルマキールティにおける普遍と
同一基体性について

秦 野 貴 生

1. はじめに

本稿はダルマキールティ (Dharmakīrti, 法称, ca. 600-660)⁽¹⁾ の使用する普遍 (sāmānya) という概念について、彼の主著である『プラマーナ・ヴァールティカ』 (*Pramāṇavārttika*) 第1章「自己のための推理 (svārthānumāna)」、及びそれに対する自注 (*Pramāṇavārttikasvavṛtti*)⁽²⁾ における用例を検討し、考察することを目的とする。自注の訳に際しては、シャーキャブッディ (Śākyabuddhi, ca. 660-720) による復註 (*Pramāṇavārttikaṭīkā*) とカルナカゴーミン (Karaṇakagomin, ca. 9-10c) による復註 (*Pramāṇavārttikasvavṛttiṭīkā*) を適宜参照した。

ディグナーガ (Dignāga, ca. 480-540) 以降の仏教論理学においては認識対象が自相 (svalakṣaṇa) と共相 (sāmānyalakṣaṇa) の二つであることによって、正しい認識手段 (pramāṇa) も、自相を認識する手段としての知覚 (pratyakṣa) と、共相を認識する手段としての推理 (anumāna) のみに限定される。このことはヴァイシェシカ学派やミーマンサー学派なども仏教論理学の基本的な主張として言及しているが、彼らの多くは普遍実在論の立場に立つため、「共相」と「普遍」との相違については特に意識していないようである。また、ダルマキールティの先行研究においても「共相」と「普遍」について明確な区別がなされていないように思われる。⁽³⁾

ダルマキールティにとって普遍とは言語活動 (vyavahāra) と関連するものであり、実在するものではない。すなわち、普遍に関する言語活動がいかにして可能であることを示すことが彼にとっての課題であった。一方、共相はそのような言語活動の可能性の議論ではなく、認識の対象に関する議論で用いられる概念である。実際ダルマキールティの著作中に共相とい

う語が用いられることは極めて少ない⁽⁴⁾。また、もう一方の認識対象である自相は認識の対象であると同時に言語活動の根拠を与える役割も持っているため、共相と比較しても著作におけるその使用頻度は少なくない⁽⁵⁾。

以上のことを踏まえ、本稿では共相と普遍との区別を明確にする前段階として、言語活動における普遍の可能性についてのダルマキールティの議論を検討する。その際、普遍と対になる同一基体性 (sāmānādhikarāṇya) に関する言語活動との関係にも配慮しながら、ダルマキールティにおける普遍の位置づけを考察する。

2. 普遍と同一基体性の用例

普遍と同一基体性の用例はダルマキールティの著作中にそれぞれ多数見られるが、本稿では両方を関連づけて検討するために、それらが複合語などとして連なって用いられる箇所に絞って取り上げる。そのような用例はダルマキールティの著作全体で計3回あり⁽⁶⁾、いずれも『プラマーナ・ヴァールティカ』第1章自注におけるものである。

以下に、その三つの用例全てを訳出する。後述での検討の際に論拠を提示するため、内容の区切りごとに丸数字を付す。

【用例1】

①他の排除が語の意味対象 (śabdārtha) である〔と主張する〕場合でも、〔語は〕それ (= 他の排除) によって限定されたものを表示しているので、それを持つものという主題について述べられた同じ誤りが全て帰結する、と述べられた〔批判〕も、これによって退けられた。②すなわち、その〔主張〕においては、〔実在する普遍という〕別の対象 (arthāntara) [の成立] に基づいて、それとは別の〔普遍を持つ〕もの (anyatra) を

意味する語が〔直接普遍を持つもの⁽⁷⁾を表示していないが故に〕自立的ではない (asvātantrya) などの過失によって排除される。③しかし、他のものからの区別 (vyāvṛtti) は、区別されたもの (vyāvṛtta) と別の対象ではない。なぜならば、〔区別を表示する語と区別されたもの⁽⁷⁾を表示する語の〕二者は、同一〔の、他のものからの区別〕を表示するからである。以上は既に述べたことである。

〔反論者：〕 それでは〔他のものからの区別と区別されたものとが同一であるとき、他のものから〕区別された、単一なるもの (= 自相) は、他のものと共通性を持たないので (anyānanugamāt)、〔自相と一体のものである〕他のものからの区別が、どうして普遍であるのか⁽⁸⁾。〔定説論者：〕 その知 (= 区別を認識している分別知) に、そのように〔同一の形象のものとして〕現れるからである。すなわち、普遍と呼ばれる〔実在するもの〕は決して存在しない。④語を拠り所とする〔分別〕知は、無始時來の習気の力によって、〔本来は〕混じり合っていない諸属性であっても、混じり合わせて生じる。⑤それら〔の分別知〕に〔単一形象として〕現れることによって、〔実際にはそのような〕対象は存在しないにもかかわらず、普遍や同一基体性〔に関する表現〕が設定される。〔なぜ普遍や同一基体などが実在する対象として存在しないのかという、〕⑥諸対象 (= 自相) は、混じり合うことも分割されることもない (saṃsargabhedābhāva) からである⁽⁹⁾。

【用例 2】⁽¹⁰⁾

⑦〔分別〕知に現れている対象について、〔他のものとの共通性である〕普遍あるいは〔一つのものの諸属性間の〕同一基体性、属性と基体〔の分節などの〕言語活動〔が行われる〕。⑧この〔諸対象が現れている〕分別知は、実在それ自身 (vastusvabhāva) を把握した〔過去の〕直接経験

(anubhava) によって置かれた習気を抛り所として生じ、それ（＝実在それ自身）を対境としていないにもかかわらず、それを対境としているかのように〔現れる。すなわち、〕⑨それ（＝実在それ自身）の直接経験によって置かれた習気から生じたものであることを本性（prakṛti）としているので、それ（＝実在それ自身）である（tadbhāva）と思い込まれたものの（adhyavasita）を自らの姿（svarūpa）としているのである。⑩また、〔その分別知は、〕結果が区別されない実在（padārtha）から生じることによって、区別されない対象を把握するものであるかのように〔現れる。しかしその分別知は〕勝義においては、それ（＝同類と思い込まれているもの＝区別されない対象）とは別のものからの異なり（bheda）である等しい（samāna）形象を持っている。⑪その〔分別〕知に、対象の形象は、外界のものであるかのように、同一のものであるかのように、効果的作用をなさないけれども、それをなすものであるかのように現れる。なぜならば、⑫言語行為者たちは、そのように（＝知に現れている形象を外界の対象である）と思い込んで〔外界の対象に向けて〕活動を起こすからである。もしそうでないならば、〔外界の対象に向けて〕活動を起こすことは不可能だからである。⁽¹¹⁾

【用例 3】

⑬それ（＝知に現れている対象）は、〔ある特定の〕効果的作用をなすものとして〔知に〕現れているので、それをなさないものから区別されたものであるかのように〔現れる〕が、それは〔実在対象〕そのもの（tattvam）ではない。なぜならば、〔それ自体は、効果的作用をなすものではないので、真剣な〕考察に資するものではないからである。⁽¹²⁾このことは、後に説明しよう。⑭それら知の中に存在している（＝現れている）諸対象は、それ（＝他のものからの区別を特徴とする普遍）に関して等しい

と把握される。なぜならば、⑮ある特定のもの (kutaścid) からの区別 (vyāvṛtti) として〔知に〕現れているからであって、自相が〔把握されている〕のではない。なぜならば、〔自相は〕その〔知〕には現れないからである。〔また〕それらの、ある特定のものから区別されたもの (vyāvṛtta) は、さらに別のものからの区別も持ちつつ (vyāvṛttimat)、〔その二つは〕分割されないもの (abhinna) 〔として〕現れる。それ自体としては (svayam) 存在しないものであっても、〔分別〕知によって、そのように (=同一の形象を持つものとして、あるいは二つの属性が一つのものとして) 示されるので、錯誤を対象としてはいるが、普遍や同一基体性〔を表示する〕言語活動が行われる。⑯これら一切〔の言語活動〕は錯誤したもの (viplava) 〔ではあるが、〕他ならぬ自相のみを知覚したことによって置かれた習気によって作られたものであるので、それ (=自相) に依存して生じた諸々の分別知は、それ (=自相自身) が現れていなくても、諸實在 (vastu=自相) に対して整合性がある (avisamvāda) 〔ものとなる〕。宝石の光に対して宝石〔であるという〕錯誤した〔知が、宝石に対して整合性を持っている〕のと同様である。しかし、他の〔自相の経験に基づかない分別知〕は〔自相に対して整合性を持って〕いない。⑰その〔同じ〕差異 (bheda) から生じたものであっても、経験した通りの差異 (viśeṣa) に従った〔確定知〕を離れて、いかなる普遍の把握にも〔有効性はない〕。なぜならば、〔経験に基づく理解とは〕異なった差異を増益しているからである。灯火の光に対して宝石〔であると思ひ込む錯誤した〕知が〔宝石に対して整合性を持たない〕のと同様である。したがって〔分別知は錯誤したものであるので〕、分別知の対境である諸対象 (=分別知に現れている対象) は効果的作用をなすものではない。

また⑱自相には無常性など〔の普遍〕は存在しない。なぜならば、変化する實在以外に、無常性と呼ばれるような〔実体的な普遍〕は何も存在し

ないからである。⁽¹³⁾

3. 普遍に関する言語活動

言語活動 (vyavahāra) の観点から、前節で挙げた三つの用例を考察する。丸囲みの数字は、前節の用例中の対応する箇所を示す数字である。

まず⑦では「普遍」と「同一基体性」と「属性・基体」の三つが言語活動として挙げられている。これら三つのみで言語活動が全て尽くされているか否かは議論の余地があるが、それぞれがどのようなものであるかは用例から示すことができる。また、それらが全て「他からの区別」(vyāvṛtti) を元に構成されることも指摘することができる。

第64偈では「排除」⁽¹⁴⁾と「排除を持つもの」、「種」と「種を持つもの」などを別なるものとして捉える他者の見解への批判が主題となっている。語の対象である「他からの区別」(vyāvṛtti) と「他から区別されたもの」(vyāvṛtta) は両者とも同じ他のものからの区別を表示しているため(③)、64偈及び①の通り「排除」と「排除を持つもの」といった属性(dharma) と基体(dharmin) の関係にあるものも異なるものではなく、⁽¹⁵⁾それらを異なるものとして捉えた上での批判は全て退けられるのである。そのことは、②にあるように「普遍を表示する語」と「普遍を持つものを表示する語」に関しても同様である。

「他の全てのものから区別されたもの」である自相(svalakṣaṇa)は、他と混合することなく、単一で実在するものであるが、一方「ある特定の他のものからの区別」は、一群のものに共通に存在し、その意味で普遍的(sāmānya) といえる(⑭)。それは実体として存在するものではないので、効果的作用の能力を持った実在ではない(⑬)。

そのような普遍的な「ある特定の他のものからの区別」は、同時に一つのものに複数存在することができる(⑮)。すなわち、複数の差異

(bheda) が同一の基体に属することが可能であり、これが「同一基体性」の根拠となる。このような複数のものに共通に存在し、また一つのものに複数共存する「他のものからの区別」としての属性は、実在するものではない (⑤, ⑬)。実在しているのは、他の全てのものから異なり、決して混じり合うことも分けられることもない存在である自相である (⑥, ⑱)。

以上から「普遍」「同一基体性」「属性・基体」についての表現が「他からの区別」に基づいて成立することが分かる。そのうち、一つの差異が複数のものに共通である関係である「普遍」と、一つのものが複数の差異を持っているという関係である「同一基体性」とはきれいな対比関係にあることが見てとれる。

4. 普遍と思い込み・整合性との関係

普遍を含む言語活動には、思い込み (adhyavasāya⁽¹⁶⁾) と整合性 (avisamvāda) とが深く関連しているため、本節では思い込みや整合性といった語に着目して、2 の三つの用例を検討する。

⑪、⑬にあるように、分別知に現れる対象は、実在ではなく効果的作用 (arthakriyā) も持たないが、あたかも効果的作用を持つかのように、外界のものであるかのように、実在と同一であるかのように思い込まれる (adhyavasita)。⑫は言語行為者たちが、そのように誤って思い込むことにより普遍などの言語活動が行われることを示している⁽¹⁷⁾。このことは分別知が、実在を直接経験 (anubhava) することなどにより置かれた習気から生じていることに起因している (⑧)。つまり分別知は習気から生じたことを本性とし、実在していると思い込まれたものを自らの内実としているのである (⑨)。

既に述べたように、それ自体としては存在せず、そのように思い込まれ

ただけのものに過ぎない普遍や同一基体性は、全て錯誤したものである。しかし、その元となっている分別知は、自相と結びついて (pratibaddha) 生じているか否かによって整合性を持つか否かが決定される。すなわち全ての分別知が自相の直接経験に基づいて生じているわけではない。

自相を過去に直接経験したことによって集積された習気から、後に、実在しない共通性である属性を捉える分別知が生じ (④)、この自相と分別知の因果関係に基づき、分別知の中に現れているに過ぎない属性の認識が自相に対して整合性 (avisaṃvāda) を持つことになる (⑩)。

⑩, ⑪では分別知の整合性について、宝石 (maṇi) と灯火 (dīpa) の例が述べられる。宝石の光に対し「これは宝石である」という知が生じる場合は、分別知は自相の経験を基としている (⑩)。一方灯火の光に対し「これは宝石である」という知が生じる場合は分別知は自相の経験を基としていない (⑪)。いずれの知も実在していない意識内の存在を実在しているものと思い込んでいる点で錯誤したものであるが、前者は経験通りの差異に基づいた、自相に対し整合性のある知 (=確定知) であり、後者は経験通りの差異と異なったものを増益 (samāropa) しているため整合性を持たない知なのである。

したがって、分別知が自相の経験を基としているかどうかにより知が整合性を持つかどうかは決定されるが、いずれにおいても分別知上の対象を自相と捉える錯誤した思い込みはあり、その思い込みにより言語行為者は普遍や同一基体性などの言語活動を行う。つまり整合性の有無にかかわらず、思い込みによって普遍などの言語活動は行われるのである。

5. まとめ

以上、普遍と同一基体性が連なって使用される三つの用例において、二

つの観点から普遍についての検討を行った。それにより明らかとなったことをまとめると次のようになる。

「普遍」は「同一基体性」「基体・属性」と並ぶ言語活動の一つであり、それらは言語活動における中心的な役割を担っている。いずれも実在ではないが、一つの差異が複数のものに共通しているという関係である普遍と、一つのものが複数の差異を持っているという関係である同一基体性とはきれいな対比関係にある。知の中の諸対象の間の関係、あるいはそれらに対する表現の仕方の相違によって「普遍」「同一基体性」「基体・属性」などの言語表現の相違が生まれることになる。

分別知上に現れる対象を外界実在と思い込み、言語行為者たちは言語活動を行うが、自相と分別知の中の対象とには、習気を介した間接的因果関係がある場合に自相に対する整合性が成立し、因果関係がない場合には、誤った認識になる。

本稿では、『プラマーナ・ヴァールティカ』第1章自注において普遍と同一基体性が連なって用いられる用例三つを訳出して検討し、それによりダルマキールティの捉える言語活動を整理するとともに、言語活動における普遍の位置づけを同一基体性との比較を通して明らかにした。

注

- (1) 本稿における仏教徒の年代は Frauwallner (1961) に従う。
- (2) 以下、本稿中の「自注」はすべて *Pramāṇavārttikasvavṛtti* を指すこととする。
- (3) ダルマキールティの用いる共相の位置づけに関しては別稿にて論ずる予定である。本稿では簡潔にふれるだけとしたい。
- (4) Cf. Ono, Oda and Takashima (1996, pp. 1077-1079), Sakai and Takashima (2015, p. 458).
- (5) Cf. Ono, Oda and Takashima (1996, p. 1125), Sakai and Takashima (2015, p. 477).
- (6) Cf. Ono, Oda and Takashima (1996, p. 1076).

(7) PVT 77a7:

spyi dang ldan pa dang dngos su mi brjod pa'i phyir rang dbang med pa yin te /

Cf. PVSVT 153, 23-24:

sākṣāt sāmānyavato 'nabhidhānād asvātantryaṃ /

(8) Cf. PVT 77b2-3:

da ni zhes bya ba ni ldog pa dang de dang ldan pa dag gcig pa nyid yin na'o // rang gi mtshan nyid ldog pa gcig gzhan gyi rjes su mi 'gro ba'i phyir ro // don gzhan dang ma 'brel pa'i phyir ji ltar gzhan las ldog pa rang gi mtshan nyid kyi bdag nyid du gyur pa rang gi mtshan nyid bzhin du rjes su 'gro ba (Peking: 91b2, Derge: ba'i) ma yin pa spyi yin par 'gyur te/
PVSVT 154, 4-6:

idānīm iti vyāvṛttitadvator aikye/ ekasya vyāvṛttasya svalakṣaṇasyān-anugamāt / arthāntarāsaṃsargāt / kathan tasya svalakṣaṇasyātmabhūta vyāvṛttiḥ svalakṣaṇavad ananvayini sāmānyam syāt /

(9) PVSV 34, 19-35, 2:

yad āhuḥ / anyāpohe 'api śabdārthe tadviśiṣṭasyābhidhānāt tadvatpakṣo-ditaḥ sarvaḥ prasaṅgaḥ samāna iti tad apy anena prativyūḍham / tatra hy arthāntaram upādāyānyatra vartamāno dhvanir asvātantryādidoṣair upa-drūyate / na cārthāntaram anyasmād vyāvṛttir vyāvṛttād dvayor ekābhi-dhānād ity uktam / katham idānīm ekasya vyāvṛttasyānyānanugamād anyavyāvṛttiḥ sāmānyam / tadbuddhau tathā pratibhāsanāt / na vai kiṃcīt sāmānyam nāmāsti / śabdāśrayā buddhir anādivāsanāsāmarthyād asaṃ-sṛṣṭān api dharmān saṃsṛjanti jāyate / tasyāḥ pratibhāsavaśena sāmānyam sāmānādhikaraṇyaṃ ca vyavasthāpyate/ asadartho 'pi / arthānām saṃsar-gabhedābhāvāt /

Cf. PVSvt 280a2-5:

sgra'i don gzhan sel ba can la yang des khyad par du byas pa brjod pa'i phyir / de dang ldan pa'i phyogs la brjod pa'i thal ba thams cad mtshungs par 'gyur ro // zhes smras pa gang yin pa de yang 'dis bsal te / de la ni don gzhan la brten nas 'jug pa'i sgra rang dbang med pa la sogs pa'i nyes pas gnod par 'gyur ro // gzhan las ldog pa ni log pa las don gzhan pa yang ma yin te / gnyi gas gcig brjod pa'i phyir ro zhes bshad zin to // da ni log pa gzhan gyi rjes su mi 'gro ba'i phyir / ji ltar gzhan las ldog pa spyi yin zhe na / de'i blo la de ltar snang ba'i phyir ro // spyi zhes bya ba ni 'ga' yang

med kyi / sgra'i rten can gyi blo thog ma med pa'i bag chags kyi mthus chos
ma 'dres pa dag kyang bsre zhing skye'o // don med bzhin du yang de snang
ba'i dbang gis spyi dang gzhi mthun pa nyid du rnam par gzhag ste / don
rnams la 'brel pa dang tha dad pa med pa'i phyir ro //

(10) 用例 2 の和訳については福田 (1999, pp. 92-93) も参照のこと。

(11) PVSV 42, 12-20:

jñānapratibhāsiny arthe sāmānyasāmānādhikaraṇyadharmadharmi vyava-
hārāḥ / yad etaj jñānaṃ vastusvabhāvagrāhiṇānubhavanāhitāṃ vāsanām
āśritya vikalpakam utpadyate 'tadviṣayam api tadviṣayam iva tadanu-
bhavāhitavāsanāprabhavaprakṛter adhyavasitatadbhāvasvarūpam abhinna-
kāryapadārthaprasūter abhinnārthagrāhiva tadanyabhedaparamārtha-
samānākāram / tatra yo 'rthākāraḥ pratibhāti bāhya ivaika ivānārtha-
kriyākāry api tatkāriṇa vyavahāriṇāṃ tathādhyaśāya pravṛtṭeḥ /
anyathā pravṛtṭiyogāt /

Cf. PVSVt 284b4-7:

shes pa la snang ba'i don la spyi dang gzhi mthun pa dang / chos dang chos
can gyi tha snyad rnams 'dogs te / dngos po'i rang gi ngo bo 'dzin pas nyams
su myong bas gzhag pa'i bag chags la brten nas rnam par rtog pa'i bag chags
skye ba gang yin pa 'di ni de'i yul can ma yin yang / de'i yul can lta bu de
nyams su myong bas gzhag pa'i bag chags las skyes pa'i rang bzhin yin pa'i
phyir / de'i dngos por lhag par zhen pa'i rang gi ngo bo can 'bras bu tha mi
dad pa'i dngos po las skye ba'i phyir / don tha mi dad pa 'dzin pa lta bu don
dam par na de las gzhan pa las tha dad pa dang / rnam pa mtshungs pa can
yin te / de la don gyi rnam pa yod pa ni tha snyad 'dogs pa rnams de ltar
lhag par zhen nas 'jug pa'i phyir / phyi rol lta bu dang / gcig pa lta bu dang /
don mi byed kyang de byed pa lta bur snang ste/ gzhan du na 'jug pa mi
rung ba'i phyir ro //

(12) PVT 95a3:

ci'i phyir zhe na/ don bya ba mi byed pa nyid kyis brtag cing dpyad pa'i yan
lag ma yin pa'i phyir ro //

Cf. PVSVT 182, 7-8:

kiṇ kāraṇaṃ/ anarthakriyākāritvena parikṣāyā vyabhicārasyānaṅgatvāt /

(13) PVSV 42, 20-43, 9:

tad arthakriyākāritayā pratibhāsanāt tadakāribhyo bhinnam iva / na ca
tat tattvaṃ parikṣānaṅgatvād iti pratipādayiṣyāmaḥ / te 'rthā buddhi-

niveśinas tena samānā iti gṛhyante kutaścid vyāvṛtṭyā pratibhāsanāt / na svalakṣaṇam / tatrāpratibhāsanāt / ta eva ca kutaścid vyāvṛtṭāḥ punar anyato 'pi vyāvṛtṭimanto 'bhinnāś ca pratibhāntiti / svayam asatām api tathā buddhyā upadarśanān mithyārtha eva sāmānyasāmānādhikaraṇyavyavahāraḥ kriyate / sarvaś cāyaṃ svalakṣaṇānām eva darśanāhitavāsanākṛto viplava iti tatpratibaddhajanmanām vikalpānām atatpratibhāsitve 'pi vastuny avisaṃvādo maṇiprabhāyām iva maṇibhrānteḥ / nānyeṣām / tadbhedaprabhave saty api yathādiṣṭaviśeṣānusaraṇaṃ parityajya kiṃcitsāmānyagrahaṇena viśeṣāntarasamāropād dipaprabhāyām iva maṇibuddheḥ / tena na vikalpaviśayeṣv artheṣv arthakriyākāritvam / nāpi svalakṣaṇasyānityatvādyabhāvaḥ / yasmān nānityatvaṃ nāma kiṃcid anyac calād vastunaḥ /

Cf. PVSvt 284b7-285a5:

de ni don bya ba byed pa nyid du snang ba'i phyir / de ni byed pa dag la tha dad pa lta bu ste / de yang brtag pa'i yan lag ma yin pa'i phyir / de kho na nyid ma yin no zhes bshad par bya'o // blo la gnas pa'i don de dag ni de dang mtshungs so zhes bya bar 'dzin te / 'ga' zhig las log par snang ba'i phyir ro // rang gi mtshan nyid ni ma yin te / de la mi snang ba'i phyir ro // de dag nyid 'ga' zhig las log pa na gzhan yang ldog pa dang ldan pa dang / tha mi dad par yang snang ngo // bdag nyid kyis med kyang blos de ltar ston pa'i phyir / nor ba'i don kho na la spyi dang gzhi mthun pa'i tha snyad 'dogs so // 'di thams cad rang gi mtshan nyid dag kho na mthong bas gzhas pa'i bag chags kyis byas pa'i bslad pa yin pa las de dang 'brel pa las skye ba'i rnam par rtog pa rnams ni de de snang ba nyid ma yin yang dngos po la mi bslu ste / nor bu'i 'od la nor bu 'khrul pa lta bu'o // gzhan dag ni ma yin te / de'i khyad par las rab tu skye ba yin yang ji ltar mthong ba'i khyad par gyi rjes su 'brang ba yongs su bor nas 'dra ba cung zad tsam gzung bas khyad par gzhan sgro 'dogs pa'i phyir mar me'i 'od la nor bu'i blo lta bu'o // de'i phyir rnam par rtog pa'i yul gyi don rnams la don bya ba byed pa nyid med do // rang gi mtshan nyid la mi rtag pa nyid la sogs pa med pa yang ma yin te / ltar dngos po g-yo ba la ma rtogs pa nyid ces bya ba ni cung zad kyang med kyi /

(14) PV 1. 64:

tenānyāpohaviṣaye tadvatpakṣopavarṇanam / pratyākhyātāṃ pṛthaktve hi syād doṣo jātītadvatoḥ //

「したがって（＝他の排除とその基体とが別のものではないので）、他の排除（anyāpoha）を〔語や分別知の〕対境である〔と主張する立場〕においては、それ（＝他の排除）を持つもの（＝基体）が〔語や分別知の対境であるという〕主張（pakṣa）〔に対して〕述べられた〔非難〕は退けられる。なんとなれば、種とそれを持つものが別体である〔と主張した〕場合には過失となるからである。』

Cf. PVt 280a2:

de phyir gzhan sel yul la ni // de ldan phyogs la brjod pa bsal // rigs dang
de dang ldan pa dag // tha dad nyid na nyes par 'gyur /

- (15) 属性と基体は異なるものではないが、全く同じものでもないということがこの議論の直後に説かれている。

PVSV 35, 8-14:

ayaṃ dharmadharmivavyavahāraḥ parasparaṃ tattvānyatvābhyām avācyaḥ
pratanyate / na hy anyo dharmo dharmiṇo 'narthāntarābhīdhānāt / nāpi sa
eva / tadvācīnām iva dharmavācīnām api vyavacchedāntarākṣepaprasaṅ-
gāt / tathā ceṣṭāpratīyānāt saṃketabhedākaraṇam iti / etac chabdhārthe
'vācyaṭvaṃ dharmadharmiṇoḥ / vastuni tu svalakṣaṇe sāmānyalakṣaṇam
avācyaṃ abhāvāt / 「この、属性（dharma）と基体（dharmin）の言語表現
（vyavahāra）は、互いに、同一である（tattva）とも別異である（anyatva）と
もいうことができないことが明らかになる。実際、属性は、基体と異なるもの
ではない。なぜならば、他の対象を表示しているものではないからである。また、
〔属性は〕それ（基体）と全く同じものというわけでもない。なぜならば、
属性を表示する〔語〕も、それ（基体）を表示する〔語〕と同様に、他の〔他
のもの〕否定を間接的に言及しているということになってしまうからである。
もしそうであるとするならば、〔意味したいと〕望まれたことを理解させること
ができないので、〔属性を表示する語と基体を表示する語の〕言語協約の区
別はなされないであろう。それゆえ、語の意味対象については、属性と基体と
が〔同一であるとも別異であるとも〕いえないのである。一方、実在（vastu）
である自相においては共相は〔自相と同一であるとも別異であるとも〕いえない。
なぜならば、〔共相は自相に〕存在しないからである。』

- (16) 『ブラマーナ・ヴァールティカ』第1章自注に関し、adhyavasāya は例外なく「思い込み」と捉えることができる。これについては秦野（2016）を参照のこと。

- (17) 分別知に現れている対象を実在対象と思い込むことによって言語活動があるが、この二つの対象の両方に対しダルマキールティは artha という語を用い

る。まず、⑥では実在する自相に対して artha という語が用いられている。この artha は自相の特徴である効果的作用 (arthakriyā) の artha とも関連しているといえるかも知れない。そして⑩では分けることのできない対象 (abhinnārtha) に対し artha と述べられる。これら二つはいずれも実在する自相を指すものであり、同義のものと考えて差し支えないだろう。一方⑦では分別知に現れている対象 (jñānapratibhāsiny arthe) が⑥⑩と同じように artha という語で表されている。また、⑭においても知に現れている対象に対し artha という語が用いられる。この⑦と⑭の artha は実在することのない分別知上に顕現している対象のことである。よって、ここでの用例では、⑥⑩では実在対象に対し artha が用いられ、⑦⑭では分別知上の対象に artha が用いられていた。つまり本稿での用例の中では、実在対象と分別知上の対象に対し等分に artha が用いられていたこととなる。この二つの artha は当然明確に区別しなければならず、それらを峻別することはグルマキールティの分別知について考察する際に極めて重要であり、常に意識する必要があるだろう。

〈略号〉

- PV *Pramāṇavārttika*, chapter 1. Dharmakīrti. See PVSV.
- PVt *Pramāṇavārttika* (tshad ma rnam 'grel gyi tshig le'ur byas pa). Dharmakīrti. See 宮坂1972.
- PVṬ *Pramāṇavārttikaṭīkā* (tshad ma rnam 'grel gyi 'grel bshad). Śākyabuddhi. Derge ed. Tohoku No. 4220. Tshad ma, je 1b1-328a7, nye 1b1-282a7. Peking ed, Otani No. 5718. Tshad ma, je 1a1-402a8 nye 1a1-348a8.
- PVSV *Pramāṇavārttikasvavṛtti*. Dharmakīrti. In *The Pramāṇavārttikam of Dharmakīrti: The First Chapter with the Autocommentary*. Ed. Raniero Gnoli. Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1960.
- PVSVt *Pramāṇavārttikasvavṛtti* (tshad ma rnam 'grel gyi 'grel pa). Dharmakīrti. Derge ed. Tohoku No. 4216. Tshad ma, ce 261b1-365a7.
- PVSVṬ *Pramāṇavārttikasvavṛttiṭīkā*. Karṇakagomin. In *Ācārya-Dharmakīrteḥ Pramāṇavārttikam (svārthānumānaparicchedaḥ) svopajñavṛtṭyā Karṇakagomiviracitayā taṭṭikayā ca sahitam*. Ed. Rāhula Sāṃkṛtyāyana. Allahabad: Kitāb Mahāl, 1943.

〈参考文献〉

秦野貴生

2016 『『プラマーナ・ヴァールティカ』自註における adhyavasāya の位置づけ』『印度学仏教学研究』65-1: 122-125.

福田洋一

1999 「ダルマキールティにおける adhyavasāya について」『印度学仏教学研究』47-2: 91-96.

宮坂宥勝

1972 「Pramāṇavārttika-kārikā」『インド古典研究』2: 1-219.

Frauwallner, Erich

1961 “Landmarks in the history of Indian logic.” *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens*, 5: 125-148.

Ono Motoi, Oda Jun’ichi and Takashima Jun

1996 *KWIC Index to the Sanskrit Texts Dharmakīrti*. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.

Sakai Masamichi and Takashima Jun

2015 *Keyword In Context Index to Dharmakīrti’s Pramāṇaviniścaya*. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.